早稲田大学大学院　創造理工学研究科

博　士　論　文　概　要

論　文　題　目

「まちの居場所」の持続的運営に向けた汎用モデル

Development of Sustainable Management Models for “Local Community Hubs”

申　請　者

髙嶺　翔太
Shota TAKAMINE

2022年4月

わが国では、1980 年前後、少年犯罪や不登校が増加した際に、青少年の「居場所」の不足が社会的な関心を集めた。また、2000 年頃から高齢者の健康増進や、まちづくりなど、それぞれの時代のニーズに応じた「居場所」が新たに各地で開設・運営されている。こうした背景のもと、2010 年、日本建築学会は、『私的な場所でもなく、形式ばった場所でもなく、人が思い思いに居合わせられる場所。そして、新たに地縁を結びなおす場所』を「まちの居場所」と呼び、研究の射程に据えた。

人間関係を構築する「まちの居場所」の普及は、地域コミュニティの充実のため、その重要性が社会の共通認識となる一方で、近年では運営の形骸化が懸念されている。更なる「まちの居場所」の普及に向けて、運営の形骸化を生んでいる課題の抽出と、その全容の解明に基づく、持続的運営に向けた計画的手法の確立が求められている。

本研究では、全国を対象とする俯瞰的な事例調査と、個別の事例を対象とする詳細な参与観察調査の両面から「まちの居場所」にアプローチし、「まちの居場所」の運営の形骸化の実態解明を通じて、持続的運営に向けた汎用モデルの導出を目的としている。

本論文は 7 章により構成される。

序章では、背景と目的、方法、研究の位置づけを示した。

第 1 章では「研究の枠組み」として、まず「まちの居場所」の概念の誕生と変遷について整理した。そして 1980 年前後から「居場所」の社会的関心が高まり、2000 年代から「まちの居場所」が増加したことを整理した上で、近年では「まちの居場所」を支援する各種の公的事業により、様々な規準やガイドラインが設けられ、そのために自由な運営が阻害され、結果的に運営の形骸化を招きかねないという懸念があることを指摘した。また「まちの居場所」開設の始まりから時間が経過したことで、開設・運営者像にも変化が起きていると考えられることを指摘した。

続いて、「まちの居場所」に関する学術的関心の変遷を整理した。そして、近年の関心は公的側面（公認の／みんなのための／開放的な）に集まっており、私的側面（非公認の／ひとりひとりのための／閉鎖的な）という「居場所」が本来有している特性への関心が薄れていること、両側面から「まちの居場所」を論じることの必要性を指摘した。

加えて、「まちの居場所」の運営の形骸化は、私的側面と公的側面のうち、一方に偏重することにより発生するとの研究仮説を掲げ、持続的運営のために私的側面と公的側面の適切な関係のあり方を具体的に提示することの必要性を指摘した。

最後に、研究の枠組みとして以下 3 点を設定した。

①私的側面および公的側面に基づく運営者の取り組み

②私的側面および公的側面が阻害し合うことによる運営の形骸化

③私的側面および公的側面の両立による運営の形骸化への対処

第 2 章～第 4 章では、「まちの居場所」の運営の形骸化と対処の実態を解明するとともに、汎用モデル構築に向けた分析を行った。

第 2 章では「『まちの居場所』の二面性」として、「まちの居場所」の調査対象事例を選定するとともに、アンケート・ヒアリングを基に基本情報を整理し、私的側面／公的側面の観点から分析した。

対象事例抽出にあたっては、既往調査を参考とし、選定条件として、「利用者を限定していないこと」「特定の専有空間で運営されていること」「利用者間の交流があること」などを設定した。続いて運営の形骸化とそのことへの対処の経験が蓄積されている事例が多いと仮定し、公益社団法人長寿社会文化協会によるコミュニティカフェ全国連絡会のリストに掲載されている 1,146 事例から、インターネット、アンケート、ヒアリング調査によって選定条件への適合性を確認し、25 事例を抽出した。また第 4 章では利用者、地域社会組織、住民も含む詳細な参与観察調査を行うために、筆者が運営者らと信頼関係を構築し、かつ選定条件に適合する事例を別途選定し、計 26 事例を対象とした。

この 26 事例の運営者に対するアンケート・ヒアリング調査の結果、対象事例は「助け合いの関係づくり」「地域社会で活躍できる場づくり」等の深い人間関係構築の必要な取り組みを開設の目的に掲げている事例が 19 事例と多いことなどから、数多くの私的側面が見られることを示した。また一方で、市民活動仲間、地縁組織関係者など、地域の社会組織や近隣住民との連携が見られる事例が 26、公的事業を実施している事例が 21 にのぼることから、数多くの公的側面が見られることを示した。以上より、対象としている「まちの居場所」の 26 事例中 19 事例において、私的側面と公的側面の二面性が見られることが確認できた。

第 3 章では「『まちの居場所』の運営の形骸化と対処の実態」として、前章で扱った事例における公的事業の実施状況を分析した。

まず「まちの居場所」の運営を経済的に支えている公的事業から受ける「まちの居場所」の開設および運営への好影響として、「利用の増加」「学び・助け合い」「活動の幅の拡大」「ネットワークの拡大」「近隣からの信頼の増大」が、悪影響として、「利用者の偏り」「利用者トラブル」「事務負担の増大」「活動の制約」「目的を公的事業の実施と誤解されること」が認識されていることを明らかにした。また開設および運営者は、「交流の促進」「運営体制の強化」「公的事業の利用者に限定しないことの発信」「柔軟な運営への理解の拡大」「公的事業のための設備の設置」「空間の分節」「公的事業に関する行為の抑制」「利用者の受容」「公的事業のための設備の除去・遮蔽」といった方法によって悪影響の緩和に対処していることを明らかにした

そして、以上の成果から、運営の形骸化の状況と対処方法を抽出するとともに、先に示した私的側面／公的側面の図式に沿って整理した。このことを通じて、私的側面／公的側面が阻害しあって一方に偏重する事により、運営の形骸化が起きること、そのことに対処するために運営者は私的側面／公的側面を両立させつつ、均衡を図っている事を示した。また二側面の関係に着目すると、運営の形骸化への対処方法は「ⅰ　両側面に基づく活動の相乗効果を生む」「ⅱ　両側面に基づく活動を一時的に切り離す」「ⅲ　一

方の側面に基づく活動を促す」に分類できることを示した。

第 4 章では「『まちの居場所』の運営の形骸化と対処のプロセス」として、大阪府堺市の医療法人が運営する事例を対象に、利用者、地域社会組織、近隣住民らに対する詳細な参与観察調査に基づく分析を行った。

まず、来訪記録の詳細な分析や、利用者へのヒアリングを通じて、「まちの居場所」において常習的利用者が徐々に固定化されること、常習的利用者が「近所付き合いへの抵抗・不関与」「健康課題」といった共通課題を持っていること、対象事例が近隣住民らからあまり認識されていないこと、総じて対象事例が近隣住民らから疎遠の存在となっている状況を明らかにした。一方、ここまでの調査後に常習的利用者らの集団の活動範囲が「まちの居場所」の室内から屋外の公共的空間に拡大したケースについて参与観察調査を行った。そして、神社境内や商店街アーケードなどの公共的空間での活動が、近隣住民らからの肯定的な評価の獲得、利用者らと近隣住民らとの関係構築の契機となることを明らかにした。

以上のような利用者と地域社会組織、近隣住民らの関係性の実態から、運営の形骸化の状況と対処方法を抽出するとともに、先に示した私的側面／公的側面の図式に沿って整理し、運営の形骸化と対処のプロセスを整理した。そして、利用者および地域社会組織、近隣住民らの関与によっても、私的側面と公的側面のバランスが変化することを示した。

第 5 章では、「『まちの居場所』の持続的運営に向けた汎用モデルの構築と検証」として、第 1 章で設定した研究の枠組みに沿って私的側面／公的側面の関係という観点から調査成果を再整理した。そして成果を統合し「『まちの居場所』の持続的運営に向けた汎用モデル」を作成した。具体的には、運営の形骸化を私的側面／公的側面の関係によって示すとともに、運営の形骸化への対処方法を、運営者、利用者、地域社会組織、住民の視点から、「ⅰ両側面に基づく活動の相乗効果を生む」「ⅱ両側面に基づく活動を一時的に切り離す」「ⅲ一方の側面に基づく活動を促す」という大きく 3 つの分類によって示した。

またこれら作成したモデルについて、運営者らへのヒアリングを通じてその汎用性を検証した。結果、汎用性が確認できたため、「まちの居場所」の持つ本質的な二面性の両立による、持続的運営に向けた汎用モデルを提示することができた。この事により研究目的を達成した。

最後にこれらの成果を踏まえ、コミュニティの充実に対する「まちの居場所」の運営の意義と、コミュニティを充実させるために求められる施策のあり方を展望した。

終章では、各章を要約した。

早稲田大学　博士（工学）　学位申請　研究業績書

氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印

（2022年　　7月　現在）

種類別	題名、　発表・発行掲載誌名、　発表・発行年月、　連名者（申請者含む）
論文（査読付）	東京大都市圏における都市環境と就業者の精神的健康との関連―居住地・就業地の近隣環境と通勤条件に着目して―、日本建築学会計画計論文集87(795)、pp. 876-886、2022年5月、竹下佑、後藤春彦、山村崇、高嶺翔太
論文（査読付）	高経年分譲集合住宅団地に居住する不就業高齢者の孤独感解消及び主観的健康感向上にむけた方策のあり方に関する研究、日本建築学会技術報告集66、p. 961-966、2021年6月、伊藤日向子・後藤春彦・髙嶺翔太・松浦遥
○論文（査読付）	公的事業がコミュニティ・カフェに与える影響と運営者による対応、日本建築学会計画系論文集86(780)、p. 437-447、2021年2月、髙嶺翔太・後藤春彦
○論文（査読付）	環境認知に着目した主観的健康感に関する基礎的研究:－奈良県橿原市在住中高齢者を対象とするエレメント想起法調査を用いて－、日本建築学会計画系論文集84(765)、p. 2391-2399、2019年11月、髙嶺翔太・後藤春彦・劉冬晴・山村崇
○論文（査読付）	「まちの居場所」の集団的孤立に関する研究　－ 診療所による運営の事例に着目したケーススタディー、日本建築学会計画系論文集84(755)、p. 147-157、2019年1月、髙嶺翔太・後藤春彦
論文（査読付）	河川管理用通路と沿川建物の特性の関係性に関する研究―江東内部河川における西側河川を対象として―、都市計画論文集53(3)、p. 495-502、2018年10月、北村佳恋・後藤春彦・高嶺翔太・馬場健誠・林書嫻
論文（査読付）	沿道の風土・歴史的要素が都市内高速道路の車窓シークエンス景観に与える影響、日本建築学会計画系論文集78(686)、p. 857-865、2013年4月、高嶺翔太・後藤春彦・馬場健誠・山村崇
論文（査読付）	首都高車窓シークエンス景観における沿道景域の変化要因とその印象評価、日本建築学会計画系論文集76(668)、p. 1903-1910、2011年10月、高嶺翔太・後藤春彦・佐藤宏亮・山村崇
講演（招待）	高齢者の健康増進に資する「居場所」のキャパシティを考慮した相互補完に関する研究、（公財）医療科学研究所 医療経済研究会、2022年4月25日、高嶺翔太
講演（招待）	コミュニティ醸成を通じた高経年団地型マンションの価値創造に関する研究、日本建築学会コミュニティ居住小委員会、2022年2月21日、高嶺翔太
講演（招待）	The spread of making of "Ibasho" around town、Workshop on Community Design under Multi-Cultural Society @ University of Sydney、2020年2月14日、Shota Takamine
講演（招待）	まちとひとの健康を生み出す居場所づくり―運営の傾向と診療所による開設事例―、Medicine-Based Town International Workshop Series "Supporting Town Planning for Health",2019年1月19日、髙嶺翔太
講演	内発的動機に基づいた社会的紐帯の形成に寄与する外部関係者の介入のあり方と役割に関する実証的研究　越後妻有アートトリエンナーレへの作品出展を介した10年間の活動成果を振り返り、日本建築学会大会（北陸）学術講演会、2019年9月、永野聡・山近資成・高嶺翔太
講演	薬用作物を用いた農村健康観光の開発　その1　モニターツアーを通じたコンテンツの有効性検証、日本建築学会大会（東北）学術講演会、2018年9月、髙嶺翔太・林書嫻 ・後藤春彦・ 山村崇・ 森田椋也・馬場健誠
講演	薬用作物を用いた農村健康観光の開発　その2　モニターツアーを通じた医学的効果の検証、日本建築学会大会（東北）学術講演会、2018年9月、林書嫻・遊佐敏彦・髙嶺翔太・後藤春彦・山村崇
講演	園芸療法を通した医学的エビデンスにもとづく農村医療観光の開発　その1　奈良県を対象としたツアープロトタイプ検討、日本建築学会大会（中国）学術講演会、2017年9月、髙嶺翔太・林書嫻、後藤春彦・山村崇・森田椋也
講演	園芸療法を通した医学的エビデンスにもとづく農村医療観光の開発　その2　ツアープログラムの予備実験による健康尺度の検証、日本建築学会大会（中国）学術講演会、2017年9月、林書嫻・髙嶺翔太・後藤春彦・山村崇・森田椋也

早稲田大学　博士（工学）　学位申請　研究業績書

氏名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿印

（2022年　　7月　現在）

種類別	題名、　発表・発行掲載誌名、　発表・発行年月、　連名者（申請者含む）
講演	首都高計画地の従前用途が及ぼす首都高車窓景観への影響に関する研究、日本建築学会大会（北陸）学術講演会、2010年9月、高嶺翔太・後藤春彦・佐藤宏亮
講演	首都高計画地の従前用途が及ぼす首都高車窓景観への影響に関する研究、日本建築学会大会（北陸）学術講演会、2010年9月、高嶺翔太・後藤春彦・佐藤宏亮
講演	首都高のシークエンス景観の構造　−景観領域の存在と街・道路構造との関係について−、2010.5　日本生活学会大会、2010年5月、高嶺翔太・後藤春彦・佐藤宏亮
著書	無形学へ―かたちになる前の思考― まちづくりを俯瞰する5つの視座、水曜社、2017年4月、後藤春彦・三宅諭・高嶺翔太・山崎義人・佐久間康富・佐藤宏亮・山村崇・ 山川志典・吉江俊ほか (1 章「共発的景域論」担当)
その他（公開報告書）	団地・マンションの暮らしを豊かにする小さなはじまり―コミュニティ活動がどう生まれ、広がるか―、2020年5月、後藤春彦・林 書嫻・高嶺翔太・伊藤日向子・金子柚那・黒澤翔・富樫遼太ほか
その他（公開報告書）	今井町まちなじみガイドブック、2019年1月、後藤春彦・山村崇・馬場健誠・岡村竹史・林 書嫻・高嶺翔太・津島英征・本田理沙・松本慎・リウェ・リムジョンミン
その他（公開報告書）	今井町くらしの記憶の口述史―受け継がれる多世代の思い出―、2017年2月、後藤春彦・山村崇・馬場健誠・林 書嫻・高嶺翔太・竹下佑・今井梨花・清水有愛・小野翔大・劉冬晴・武田顕哉
その他（受賞）	園芸療法を通した医学的エビデンスにもとづく農村医療観光の開発　その1　奈良県を対象としたツアープロトタイプ検討、日本建築学会大会（中国）学術講演会「若手優秀発表賞（農村計画部門）」、2017年9月、髙嶺翔太・林書嫻、後藤春彦・山村崇・森田椋也
その他（受賞）	まちづくりオーラル・ヒストリーからはじまるまちづくり活動へのアプローチ、日本都市計画学会大会ポスターセッション 「優秀ポスター賞」、2012年5月、高嶺翔太・佐藤宏亮・馬場健誠・金子奈津・河内昇平・陳海韻・前田茜・柳沼優樹・山本香菜・林書嫻
その他（受賞）	史的文化磁場の再生～芸・緑・道が織りなす回遊劇場～、公益財団法人都市づくりパブリックデザインセンター　第13回まちの活性化・都市デザイン競技「奨励賞」、2011年3月、武藤弘樹・永野聡・高嶺翔太・柳沼優樹・杉木勇太・常名慶一郎
その他（受賞）	日本の原風景である棚田の耕作範囲の縮減像 -新潟県における旧小学校区の七集落を対象として-、第7回GISコミュニティフォーラムマップギャラリー「5位入賞」、2011年、柳沼優樹・前田茜・河内昇平・金子奈津・高嶺翔太・陳海韻・山本香菜・林書嫻
その他（受賞）	歴史的経緯に着目した首都高のシークエンス景観の構造に関する研究、早稲田大学理工学部建築学科「優秀卒論賞」、2010年3月、髙嶺翔太
その他（出展）	からむしの部屋、越後妻有アートトリエンナーレ大地の芸術祭、2012年7月・2015年7月・2018年7月、doobu